様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　５月１５日現在

研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2006～2008
課題番号：１８５２０２６５
研究課題名（和文）　ケンペル研究の新展開

研究課題名（英文）　A new trend in the study on Kaempfer

研究代表者
中　直一　(NAKA NAOICHI)
大阪大学・大学院言語文化研究科・教授
研究者番号：50143326

研究成果の概要：

ケンペルの著書『今日の日本』（ドイツ語新版）に基づき、ケンペル日本論の分析を行った。またとりわけ、この新版と、１８世紀末以降底本と見なされて来たドーム版（旧版）『日本誌』との文献対比作業を行い、ドーム版の文献学的価値を究明した。その結果、ドーム版には編者ドームによる書き換え箇所が散見されるものの、難解なスタイルのドイツ文で書かれたケンペルの日本論を、一定の読みやすさに直して提供した功績も認められる、との結論を得た。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	1,600,000	0	1,600,000
２００７年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２００８年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	3,300,000	510,000	3,810,000

研究分野：比較文学、日独文化交流
科研費の分科・細目：文学　各国文学・文学論
キーワード：ケンペル、異文化理解、江戸時代、来日外国人、日本観

１．研究開始当初の背景

周知のようにケンペル(1651-1716)の日本論は、ケンペルの生前に刊行されることはなく、彼の死後約６０年たった１８世紀後半にようやく、Ch.W.v.ドームにより編集された版である『日本誌』が刊行された。それ以来２００年にわたり、ケンペルの日本論は、このドーム版が使用されてきたが、ドーム版には編者ドームによる様々な文体上の書き換えがなされており、ドーム版をどのように評価すべきかについて研究者の間では、大きく二つの立場に意見が分かれている。すなわちドーム版の書き換えがケンペルの真意を曲げるものであるとし、ドーム版を全く無価値なものと見る立場と、逆にドームの編集態度に行きすぎはなく、きわめて難解なケンペルの自筆原稿に基づく新版『今日の日本』を解読するための補助手段として、ドーム版にいまなお価値があるとする立場である。

たとえばDerek MassarellaおよびBeatrice Bodart=Baileyは、ドームによる編集に行きすぎがあったと考え、ケンペル日本論は新版

『今日の日本』においてのみ、その真の姿をあらわす、と主張している。Bodart-Baileyはこの観点から、ケンペル日本論の自筆原稿を英訳した版を出版した。

他方Wolfgang Michelは、自ら新版『今日の日本』の編集に当たりつつ、ドーム編集の旧版と新版とを部分的に対比し、ドームの編集態度に行きすぎはなかった、との説を提唱している。

このように、従来のすべての邦訳が依拠していた旧版『日本誌』に対する評価が、ケンペル研究者の間で正反対の二つの立場に分かれているのが現状である。

本研究の背景には、このような状況があり、これを解明することが本研究開始の端緒となった。

２．研究の目的

本研究は、２００１年に刊行されたケンペルの日本論・新版『今日の日本』の文献的価値を調査することを研究目的とするものであるが、上記「研究の背景」で指摘した研究状況に鑑み、研究代表者は以下の二つの研究目的を設定した。

第一に、研究代表者は従来研究者が依拠してきた旧版『日本誌』に対し、どの程度信頼がおけるものであるかを、新版との対比作業を通じて判定することを研究目的とした。この対比作業を通じて、研究期間終了の平成２０年度末までに、旧版『日本誌』における編集者ドームの書き換えの程度を判定すると同時に、ドーム版に依拠してなされてきた従来の諸研究の信頼性をも判定することを、本研究の第一の研究目的とした。

すなわち旧版と新版との対比作業を通じて、旧版の価値を評価し、そのことをもって従来の邦訳の文献的価値をも定めようとするのが第一の研究目的である。

第二の研究目的は、新版『今日の日本』の難解なドイツ語文を解明することである。ケンペル自筆およびその甥が筆写した原稿をふくむ手書き原稿のドイツ語は、語彙及び文法構造の点で、今日のドイツ語とはきわめて異なるものである。手書き原稿を忠実に翻刻した新版『今日の日本』も、従ってきわめて難解であり、旧版との単純な対比・比較作業は行いがたい。それゆえ本研究においては、難解な新版『今日の日本』の正確な解読を行うことをも、重要な研究目的となした次第である。

３．研究の方法

本研究は２つの計画を持つので、研究遂行の方法としても２つのものをたてた。

(1)　第１の研究方法は、ケンペルの日本論新旧両版の対比作業を通じて、新版『今日の日本』の文献的価値の確定を行うというものである。内容としては、ケンペル日本論の全般にわたって、新旧両版の対比作業を遂行した。ケンペルの日本論（全５巻）が扱っている分野は非常に広範にわたる。そのため、３年間の研究期間に、それぞれテーマを定め、、文献学的対比作業を行った。

(2)　第２の研究方法は、ドイツにある文献資料の調査・収集、およびそれに基づく旧版『日本誌』成立事情の研究を行う、というものである。内容的には、ドイツ国立ベルリン図書館における１８世紀末の雑誌文献の調査を行うという方法を用いた。

４．研究成果

（１）本研究では３カ年にわたる研究期間において、おもに新版『今日の日本』と旧版（ドーム版）『日本誌』の文献的対比を行った。それらの全てをここに記すことは煩瑣であり、またかえって本研究の真意を伝えがたくする危険性があるので、以下の部分においてはケース・スタディとして、日本の地名表記について行った対比研究の内容を記す。なおこの研究部分は、すでに 2006 年に研究代表者が行った予備調査的研究を発展させた物である。

ケンペルの死後約６０年たって編集・出版された『日本誌』は、従来よりケンペルの日本論について、その研究の基礎となってきた。この版を編集したのは１８世紀末からベルリンで法律学・歴史学の研究者として活動を開始し、のちに政治家となったドームである。ケンペル『日本誌』に関しては、長らくこのドーム版に基づいて研究が進められ、また２種類ある日本語訳もすべてこの版から翻訳されている 。

だが近年にいたり、ドーム版の価値を再検討すべきであるとの説も提唱されるに至った。

ここで問題となるのは、ケンペル日本論の原稿に複数の種類がある、ということである。現存するのはロンドンの大英図書館に収められているもので、仮にこれをロンドン原稿と名付けておく。1727 年に（すなわちドーム編のドイツ語版出版に先んじて）ロンドン在住のスイス人ショイヒツァーが『日本誌』の英訳をなしたが、その際の基礎となったものがこのロンドン原稿である。また２００１年にケンペル全集第１巻として『今日の日本』が出版されたが、これはロンドン原稿を活字化したものである 。

ケンペルは生前『日本誌』の原稿を完成させていたが、出版を引き受ける書店を見つけることなく没し、甥ヨハン・ヘルマン・ケンペルが伯父の遺品を引き継いだ。甥は出版を条件に伯父の原稿をロンドンの収集家スローンに売却した。これがロンドン原稿になるのだが、それとは別種の原稿が甥の手許に残っており、甥の死後ケンペルの姪に引き継がれ、彼女の死後原稿が再発見された（１７７３年)。これがドーム版のもととなった原稿で、仮にこれをレムゴ原稿と名付けておく。ドームの報告によれば、この原稿にはさらに２種類あり、筆跡の点から判断してひとつは伯父ケンペルの真筆（ドームはこれを「伯父の原稿」と名付けている)、もうひとつは甥ケンペルの写し（ドームはこれを「甥の原稿」と名付けている）であるとされる。ドームは『日本誌』を編集するに際し、「伯父の原稿」ないし「甥の原稿」をそのまま活字化するということをせずに、この両者および先行するショイヒツァーの英訳の三者を比較校合のうえ、あらたにドイツ文を書きおこした。ドームがなぜこのような編集方針を採ったのかというと、それはケンペルの時代とドームの時代では、ドイツ語の文体が非常に異なっていたからである。それゆえドームはケンペルの文章を読みやすい形に改めた。

つまりドーム版は、「伯父の原稿」ないし「甥の原稿」をそのまま活字化したものではなく、この両者（および英訳版）を参照してドームが作った、あらたなドイツ語版であると言ってよい。いずれにせよ、ケンペル日本論の原稿には、ロンドン原稿とレムゴ原稿の２種類があり、さらにレムゴ原稿そのものに２種類存在するわけである。

レムゴ原稿はドームの編集以降その行方が不明となっている。要はロンドン原稿しか現存しないのであるが、長らくロンドン原稿とドーム版を対比するという作業は行われることなく、ドーム版がケンペル日本論を論ずる時の、いわば決定版として使用されてきたのである。この点を問題視し、ロンドン原稿こそケンペルの真意を伝えるものとする研究もある。

しかしながら、ロンドン原稿に問題がない訳ではない。ロンドン原稿がすべてケンペル自筆であるのならば問題はなかろうが、実のところロンドン原稿にはケンペル本人の筆跡の他に、ケンペルの甥の筆跡、氏名不詳の筆写人（２名いる）の筆跡の部分、都合４名の筆跡が含まれているのである。すなわちロンドン原稿のうち一部は確かにケンペル自身の筆跡によるものだが、残りの部分はケンペル以外の人の筆写した部分なのである。ロンドン原稿のうち、ケンペル自筆部分以外の箇所は、ひょっとするとレムゴ原稿においてケンペル自筆であったかも知れない。だがレムゴ原稿が現存しない以上、この推測の当否を確認するすべはない。

上に述べたように、ドーム版は「伯父の原稿」ないし「甥の原稿」の単なる活字化ではない。この両者および英訳版を参考にしつつ、あらたにドイツ語文を書きおこしたものである。このような事情があるためドームは、自分の版の編集方針を示すべく、「刊行者の序文」の中で、自分がどのような編集方針を採用したのかを示すために、サンプル的に２種のレムゴ原稿の一部（ほんの一部に過ぎないが）をそのまま活字化し、その部分をどのように現代ドイツ語に編集し直したかを示しているのである。従来ドーム自身が活字化したこの部分以外には、レムゴ原稿の痕跡をとどめるものはないとされてきた。

本研究代表者はビュッシングが編集に当たった『週報』誌の第１巻第３２号（１７７３年８月９日）の中に、ごくわずかではあるが、ビュッシングがレムゴ原稿を紹介している記事を見いだした。１７７３年という年代からも判るように、ちょうどレムゴでケンペルの原稿が再発見され、まさにドームが編集を開始した時期である。本研究においては、その部分を摘記し、ドーム版の意義再検討をなした。

（２）ビュッシングが編集に当たった『週報』誌は学術についての情報誌といった趣の雑誌で、さまざまな分野（とくにビュッシングが専門とする地理学関係の分野）についての最新情報を報告する雑誌である。おそらくビュッシング自身が、自己の関心に従って集めた地理学等の新着情報について、すべて自分一人で原稿を書いたものと思われる。

ビュッシングは『週報』誌の第１巻第３０号（１７７３年７月２６日）において、原稿再発見の第一報をなしている。ビュッシングがレムゴ原稿発見のニュースをいちはやくドイツの学界に伝えた功績は大きい。

『週報』第１巻第３２号は第１巻第３０号の続報とも言うべきもので、この中でビュッシングはレムゴで発見された原稿の一部を具体的に引用し、さらにそのレムゴ原稿に該当する部分の英訳およびフランス語訳を引用した上で、三者の異同を論じている。そのような対比は１０数カ所見られる。

ビュッシングは新発見のレムゴ原稿と英訳・仏訳とを対比しつつ、英訳・仏訳の両者が必ずしもレムゴ原稿の忠実な翻訳とは言えない点を指摘し、それゆえにこそ新発見のレムゴ原稿を活字化することが重要であるという方向に論を進めている。

ビュッシングが言うような、レムゴ原稿とショイヒツァーの英訳の間に相違点があったとしても、だからといってショイヒツァーが誤訳あるいは不適切訳をなしたのだと判断することは出来ない。ビュッシングの意識

の中には、新発見のレムゴ原稿こそがケンペルの真の原稿であって、それ以外のものに基づく英訳版ないし仏訳版は価値の低いものであるとの先入観があるように見受けられる。ところで本研究におけるわれわれの課題は、ビュッシング説の当否を検討することにあるのではない。そうではなくて、ビュッシングが紹介しているレムゴ原稿をロンドン原稿と対比し、レムゴ原稿がどれくらいロンドン原稿と相違するか、あるいは一致するかを検討することにある。

本研究で研究代表は、ロンドン原稿、ショイヒツァーの英訳、レムゴ原稿およびドーム版の四者を比較対照し、ドーム版の価値再検討のための資料とした。すなわち、ロンドン原稿に基づく『今日の日本』の出版によって、ドーム版は全く無価値なものとなったのか、それとも従来の諸研究が依拠してきたドーム版には、今日なお参照すべき点があるのかという問題について、ビュッシング『週報』に引用されたレムゴ原稿を手がかりとして考察した。

（３）『週報』第１巻第３２号で紹介されているレムゴ原稿は、上記のようにほんの一部であるが、以下本研究では地名表記について四者を対比した。まず大和を表す「和州」、大和国内にあった旧１５郡のひとつ「広瀬」、および摂津の国の旧１３郡の一つ「菟原」の表記についての対比である。

「和州」についてだが、ロンドン原稿とレムゴ原稿は完全に一致する。またドーム版はウムラウトの有無という点を除けば、ロンドン原稿・レムゴ原稿に一致する。一方ショイヒツァーの英訳版では、ä ないし a に相当する部分が o と記されていて、英訳版が他の三者と異なるという印象を与える。

ロンドン原稿・レムゴ原稿・ドーム版は、「広瀬」については完全に一致し、英訳版のみ異なる（およそ日本的地名にあらざる）表記になっている。

さらに、ロンドン原稿と英訳版は、「菟原」については一致し、またレムゴ原稿とドーム版も一致する。このことから、ドーム版がレムゴ原稿を参照したことに疑いを挟む余地はなさそうである。ドーム版はレムゴ原稿に基づくものであるから、このようなことをここで再確認するのは、一見すると自明のことを仰々しく述べているように見えるかも知れない。しかしドーム版を批判的に考察する研究書の中には、レムゴ原稿の存在を疑問視し、ドーム版は英訳版をドイツ語に訳し直したものに過ぎないとするものもある。そしてそのような説に依れば、レムゴ原稿などというものはねつ造であって、ドーム版も偽書であるということになりかねないのであるから、上に述べたように「ドーム版はレムゴ原稿に依るものである」という、一見すると自明のことを再確認しておく必要があるわけである。

『週報』では、地名表記のみが取りあげられている箇所は、上記の他に２箇所ある。「吉野」および河内の旧１５郡のひとつ「高安」である。上に、「和州」、「広瀬」、および「菟原」の表記に関する限りドーム版がレムゴ原稿に基づくことに疑いはないとの見解を示したが、この「吉野」および「高安」の表記に関しては、むしろそれへの反証となりかねない実例が示されている。すなわち「吉野」に関してはドーム版のみ異なり、さらに「高安」の表記に至ってはドーム版がレムゴ原稿に相違するのみならず、むしろ英訳版に近い。つまりビュッシングの『週報』には、ドーム版がレムゴ原稿のみに基づくものであるということを必ずしも支持しない実例も含まれることをここで確認しておく必要がある。

『週報』には単語次元でなく、文章次元の引用も含まれる。以下にそれらの部分を検討してみる。まず本論文第２節冒頭に引いた箇所である。

ロンドン原稿、英訳版およびドーム版には「南から北まで１００日本マイル」という意味の記載があるが、レムゴ原稿にはない。レムゴ原稿で元々そのような箇所がなかったのか、それともビュッシングが転写に当たって省略したのか、今となっては確認のしようがない。仮にレムゴ原稿においてその箇所が欠落していたと仮定すると、ドームは英訳本でその欠を補ったという想定が成り立つ。次いで河内の国についての記述を対比する。まず「河内」の表記であるが、ロンドン原稿：Kawatsjî 、英訳版：Kawatzij、レムゴ原稿：Kawatsji、ドーム版:Kawatsji となっていて、ドーム版はレムゴ原稿に一致し、ロンドン原稿とも近い（最後の母音が i か î かの違いがあるのみである）。これに対し、英訳版は若干違う。

ドーム版がロンドン原稿とも英訳版とも、あるいはレムゴ原稿とも違って、説明的な文章を付加していることが目立つ。すなわちロンドン原稿およびレムゴ原稿では「旅程二日以上の方形をなし、中程度のよい国」、英訳版「比較的よい国で長さが旅程約二日」となっている。英訳版では「以上」を「約」に変え、またわかりにくい表現である「方形」をわかりやすく「長さ」としているが、ドーム版では「方形の形をしていて、旅程二日の長さがあり、土地は中程度である」というふうに、わかりやすく書き改めている。ドーム版で「方形」および「長さ」の両方の表現が用いられていることから判断して、ドームはレムゴ原稿と英訳版の両方を参照したと推測しうる。

「和泉」の国についての説明の部分に関し、ロンドン原稿では「それは大きな国であり、

土地は悪い。前には大きな海があり、後ろは山々で閉ざされている。魚が多く捕れ、蕎麦、米、豆その他の穀類を産するが、品質はよくない」ということになる。まず問題となるのは、レムゴ原稿では「前に大きな湖」がある（男性名詞 See を使用)、とされている点である。ドーム版では「前に大きな海」がある、すなわち依拠しているはずのレムゴ原稿とは異なり、参照できないロンドン原稿と同じ女性名詞 See を使用している。この箇所、英訳では「一方は海に」となっていて、この箇所に関する限り、ドームは英訳を参照したととれる。しかし英訳の″on one side by…, on the other by ...″という表現をドイツ語風に直したものを採用せずに、″vorn mit ... hinten mit ...″という表現を（すなわちロンドン原稿にもレムゴ原稿にも共通する表現を）採用している点から考えて、やはりドーム版の依拠しているものがレムゴ原稿であるということが伺える。

和泉の国については「鳳、和泉、日根の３郡よりなる」ということだが、ロンドン原稿でもレムゴ原稿でも「５郡よりなる」と、計算が合わない書き方になっている。ビュッシングはこの点について「著者〔ケンペルのこと〕はこれらの郡のうち３つしか知らず、それゆえ残る２つを省略したようである。訳者〔ショイヒツァーのこと〕は５という数を間違いであると考え、それにかわって３をあてた」と述べている。ドームは英訳版の処理法を踏襲している。また郡のひとつ「和泉」の表記に関し、レムゴ原稿のみ″Jasurni″となっていて、それをドーム版がおそらくは英訳版を参照して″Jdsumi″に修正したものと推測される。（もうひとつの可能性として、レムゴ原稿を『週報』に転写する際、誤植があったという推測も成り立ちうる。すなわち d を a に、m を rn に読み誤って誤植したという可能性である。――いずれにしても推測の域を出ない話ではある。）

摂津の国について、ロンドン原稿・レムゴ原稿・ドーム版の内容に違いはない。摂津の国は「西側を海の入り江で囲まれ、南側には温暖な、北側には寒冷な土地がある。それゆえ五穀、すなわち５種の主要な穀物がこの国ではよく生産される。魚と塩もあり、概して非常によい国である」という意味であるが、文章全体の構成の点から考えて、ドームは英訳版を参照したというよりは、レムゴ原稿をほとんどそのまま使用したと見てよい。

（４）レムゴ原稿と、ロンドン原稿・英訳版・ドーム版を対照して検討してきたが、このような検討作業を行った理由には二つのものがある。まず第一は、行方不明となったレムゴ原稿の一部が１７７３年発行の学術雑誌に引用されているということ、この事実を紹介することにある。上に述べたようにレムゴ原稿が引用されているのは、『週報』以外にはドームの「刊行者の序文」におけるのみであって、しかもビュッシング『週報』が入手しがたいこともあって、『週報』において紹介されたレムゴ原稿は従来注目されてきたとは言えない。

レムゴ原稿の内容を紹介した第２の理由は、ドーム版をどう評価するか、という問題に関わる。すでに本文中において述べたように、レムゴ原稿は現存せず、ドームがどの程度編集者としての自由裁量権を発揮して古いケンペルの文体を現代ドイツ語（１８世紀においての「現代」であるが）に書き改めたのか、判定する材料がない。そのような状況の中で、レムゴ原稿とドーム版を比較対照する作業により、ドームの編集方針の一端をかいま見ることが出来るものと思われる。

ドームがレムゴ原稿に基づいてケンペルの文章を現代ドイツ語に書き改めたことは、ほぼ疑いがない。ドームがレムゴ原稿を参照することなく英訳からのみ現代ドイツ語に書き改めた（というより英訳から重訳した)、という考えは排除されうるものと考えられる。ただしドームは英訳を十分に参照したようであり、部分的にはレムゴ原稿よりも英訳版に近い（あるいは一致する）箇所があるのも事実である。

ビュッシングないしドームがレムゴ原稿なるものを英訳に基づいてねつ造したのだとすると、そのねつ造されたレムゴ原稿とケンペル真筆のロンドン原稿は、語彙や構文の点で大きく異なるものとなるであろう。しかし対比作業によって明らかなように、レムゴ原稿とロンドン原稿において一致する部分はきわめて多く、ロンドン原稿を目にすることの出来なかったビュッシングないしドームが英訳版のみを手がかりに、あそこまでロンドン原稿に一致する部分の多いドイツ文を作ることはとうてい出来なかったものと考えられる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　５　件）

１　中直一　ベルリン啓蒙主義における「水曜会」の存在について（４）―シュテルツェルおよびニコライ旧蔵の文書より――（大阪大学大学院言語文化研究科『言語文化共同研究プロジェクト 2007　ドイツ啓蒙主義研究８』)、2008 年５月 30 日、1-16 頁。査読なし。

２　中直一　ベルリン啓蒙主義における「水曜会」の存在について（３）―ゲッキングおよびグローナウの文書より――　（大阪

大学大学院言語文化研究科『言語文化共同研究プロジェクト 2006　ドイツ啓蒙主義研究７』)、2007 年５月 25 日、1-16 頁。査読なし。

３　中直一　明治日本のゲーテとドイツ文化　（日本ゲーテ協会『ゲーテ年鑑』）第 49 巻、2007 年 10 月 1 日、95-109 頁。査読有り。

４　中直一　ベルリン啓蒙主義における「水曜会」の存在について（２）―ニコライおよびクラインの文書より――　（大阪大学大学院言語文化研究科『言語文化共同研究プロジェクト 2005　ドイツ啓蒙主義研究６』)、2006 年５月 25 日、1-28 頁。査読なし。

５　中直一　ケンペル『日本誌』とビュッシング（仙葉豊・高岡幸一・細谷行輝編『言語と文化の饗宴』英宝社)、2006 年 3 月 20 日、201-214 頁。査読有り。

６．研究組織

(1)研究代表者

中　直一(NAKA NAOICHI)

大阪大学・大学院言語文化研究科・教授

研究者番号：50143326

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし